

『On-line みんなで法華経を学ぼう!』 vol.28 Jul.2024

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”!

(“法華経観”を見つける旅に出よう!)

『妙法蓮華経 妙音菩薩品第二十四』 (本門・流通分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』

<薬王菩薩本事品の復習>

・自己犠牲について (P312・終3行/P230・5行)

自己犠牲の精神こそ、人間のいちばん高貴な精神なのであります。～ 大勢の利益のためには、自分の欲望はある程度犠牲にする。～ 人間にとって自己犠牲ほど高貴な精神はない。

『我神力を以て佛を供養すと雖も身を以て供養せんには如かじ』 (三三七頁 二行)

『是れ眞の精進なり、是れを眞の法をもって如来を供養すと名く』 (三三七頁 終五行)

・眞の法をもって如来を供養す (P340・1行/P251・6行)

自己犠牲の行為によって、仏法のすばらしさを世の人々にまざまざと見せ、帰依の心を起こさせることこそ、「本当の供養」である。

・黙然 (P343・終3行/P254・7行)

仏さまが説法をなさるのも、もちろん有難いことですが、ただじっと黙って座っていっしょにすることも、無量の深い意味があります。

・『所愛の身を捨てにき』 (三三八頁 七行)

所愛の身を捨てにき (P347・2行/P257・4行)

いい言葉です。誰しも自分を愛(いと)しくない人はありません。～ ほかの生物と違って、「精神」というものを持ち、「相互扶助・共存共栄」の社会生活を営む、一段高い生物である人間には、その高さのゆえにその大切な自分というものを犠牲にしなければならぬことが多いのです。～ もしそれがなかつ

たら、鳥や獣(けもの)や虫の生き方と少しも変わりはないものになりましょう。

『是の誓を作し已って自然に還復しぬ』 (三四一頁 四行)

・自然に還復しぬ

(P368・2行/P274・2行)

(焼き尽くしてしまった両腕が) また元通りになったということは、自己犠牲の行為によって、自己はけっして損(そこな)われもしないし、マイナスをこうむるものでもない。～ 肉体を損減(そんげん)したからといって、人間の本質である仏性は決して損(そこな)なわれもしなければ、減りもしないのです。

『能く是の經典を受持することあらん者も亦復是の如し。一切衆生の中に於て亦爲れ第一なり』(三四三頁 五行)

・十論称歎

(P373・終2行/P279・終2行)

法華經の素晴らしさを十の譬(たと)えて説かれる。

①【すべての教えを包容する】『一切の川流・江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く』(三四二頁 三行)

②【最高かつ中心となる教え】『土山・黒山～ 衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く』 (三四二頁 五行)

③【世を明るく照らす教え】『衆星の中に月天子最も爲れ第一なるが如く』 (三四二頁 七行)

④【不善の闇を照破する教え】『日天子の能く諸の闇を除くが如く』 (三四二頁 終四行)

⑤【感化力第一の教え】『諸の小王の中に、轉輪聖王最も爲れ第一なるが如く』 (三四二頁 終三行)

⑥【救済者中の救済者】『帝釋の三十三天の中に於て王なるが如く』 (三四二頁 終二行)

⑦【仏道へ導く父・仏教の包容性】『大梵天王一切衆生の父なるが如く』 (三四三頁 一行)

⑧【一切衆生中第一の人間】『一切の凡夫人の中に～ 是れ第一なるが如く』 (三四三頁 二行)

⑨【独善的でない菩薩第一】『一切衆生の中に於て亦爲れ第一なり』 (三四三頁 六行)

⑩【諸經の王】『佛は爲れ諸法の王なるが如く』 (三四三頁 終五行)

『諸經の中の王なり』『法華經こそが“諸經の王”なのであります』

法華經を受持する者は一切衆生のなかで第一の存在であると説かれている。～ とりもなおさず我々のことです。ですから、我々は“一切衆生の中で第一の人間”なのです。

『此の經は能く一切衆生を救いたもう者なり。～ 諸の苦惱を離れしめたもう。此の經は能く大に一切衆生を饒益して、其の願を充滿せしめたもう』(三四三頁 終三行)

この『法華經』は一切衆生を救い、苦惱から離れさせ、豊かな尊い利益を与え、その願いを満足させるものであります。

・其の願を充滿せしめたもう

(P392・1行/P294・3行)

願は、決して「物質的な満足を得たい」とか、「安樂な暮らしをしたい」というような、目先の望みではありません。～ (仏教でいう願とは) 第一に、究極において「人のため世のため」になろうという「利他の願」であるということです。第二に、理想の達成を強く願ひ固く誓う、その「決意」の点にあります。

『能く衆生をして一切の苦・一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解かしめたもう』(三四四頁 終五行)

『法華經』は、一切衆生の悩み・病気による苦を取り除き、生死の輪廻の束縛から解き放つものです。

『諸の魔賊を破し、生死の軍を壊し、諸餘の怨敵皆悉く摧滅せり。善男子、百千の諸佛、神通力を以て共に汝を守護したもう』 (三四五頁 終二行)

あらゆる魔を打ちほらい、現象の変化という難敵を克服し、あらゆる心の敵をすべて打ち砕くことができます。ですから善男子よ。法華經を実践する者はあらゆる諸仏が守護するのです

『是の人、現世に口の中より常に青蓮華の香を出し、身の毛孔の中より常に牛頭栴檀の香を出さん』
(三四六頁 四行)

その人の語る言葉によって周囲の人々を「自然に感化」し(青蓮華の香を出し)、高い徳分が行動に現れて「自然と感化」(身の毛孔の中より常に牛頭栴檀の香を出さん)するようになるのです。

・**薬王菩薩本事品の要旨**

(P433・終4行/P326・終3行)

この品で教えられている要旨は一

一、人間にとって自己犠牲ほど高貴な精神はない。

二、実践こそが教えに対する最高の供養。

(この品を受持する功德が強調して説かれています) これは、**教えは実践して初めて生きるものであり、身を以てする「法華経の実践の尊さ」を主眼に置いたものであるから**です。(P399・終2行/P300・4行)



<妙音菩薩品のあらすじ>

【釈尊の眉間から光が放ち浄光莊嚴国(理想の世界)が照らし出される】——

【三四八頁 一行】**釈迦牟尼世尊**が**薬王菩薩**の過去世について語り終えられると、突然、世尊の眉間から光明が放たれ、東方にある無数の世界・国土を照らし出しました。

その数々の国のなかに**浄光莊嚴**(じょうこうしょうごん)という国があり、その国に**浄華宿王智**(じょうけしゅくおうち)如来という仏がおられました。そこには無量無辺という無数の菩薩がおり、その菩薩たちは仏さまを取り囲んで恭敬(くぎょう/うやうやしく敬う)し、讃嘆し、仏さまがその菩薩のために教えを説かれている場面が照らし出されたのでありました。

【三四八頁 六行】その時、ひとりの菩薩がいました。名を**妙音**と言います。この**妙音菩薩**は、『**衆(もろもろ)の徳本(とくほん)を植えて**』**大変長い期間、善行を行い続け**、しかも無量百千万億という無数の仏にお仕えしたのでありました。その結果、妙音菩薩は非常に深い**智慧**を得ることができ、法華経があらゆる教えの中心であるということを確認し、**その確信が揺るがない境地・妙幢(みょうどう)三昧**や、法華経を信じ、実践することによって得られる**心が散乱しない絶対安穩の境地・法華三昧**をはじめとする数々の三昧の境地を得ることができたのでありました。そして釈迦牟尼仏が発した光は、この妙音菩薩の全身を照らし出したのでした。

【浄光莊嚴国(理想の世界)での浄華宿王智仏と妙音菩薩とのやりとり】——

【三四九頁 三行】すると、**妙音菩薩**は**浄華宿王智**に次のように申し上げました。

『**我當(われまき)に娑婆世界に往詣(おうげい)して、釋迦牟尼佛を禮拜(らいはい)し親近(しんこん)し供養し**』

「世尊よ。私はこれから娑婆(しゃば)世界に赴(おもむ)き、釈迦牟尼仏を礼拝・供養したいと存じます。そして、釈尊のそばにいる**文殊菩薩**や**薬王菩薩**、**勇施(ゆうせ)菩薩**をはじめとする菩薩がたにもお会いしたいと思います」

【浄華宿王智仏の諭(さと)し。「娑婆世界を軽んじてはいけない」】——

【三四頁 三行】 その言葉を聞いた浄華宿王智仏は、妙音菩薩に仰せになりました。

「それは善いことです。どうぞ娑婆世界へ行ってきなさい。しかし妙音菩薩よ。気を付けなければならないことがあります。／『汝彼(なんじか)の國を輕(かろ)しめて下劣(げれつ)の想(おもい)を生(な)ずることなかれ』) それは娑婆世界へ行って、その國を輕蔑(けいべつ)するような心を起こしてはならないということです。なぜならば善男子よ。そなたが行く娑婆世界という國は、土地自体が大変な高低(たかひ)があり凸凹(でこぼこ)して平坦(へいたん)ではありません。大地は土(つち)でできており(我が國のように寶石(ごうせき)でできておらず)、石(いし)がゴロゴロしていて、険(けわ)しい山(やま)々が連(つ)なり、しかも汚染(おご)されている不淨(ふじやう)なもので充満(みみ)しています。それゆえどうしても『劣(おと)った國』に見えてしまいます。しかもその國の仏(ぶつ)の大きさは大変(たいへん)小さく、また菩薩(ぼさつ)たちも同様(どうよう)に小さい体(てい)です。それに対してそなたの体(てい)は四万二千由旬(よじふせん)という大変(たいへん)大きく、私の身(み)も六百八十万由旬(ろくはちじゅうばん)という大きさです。しかもそなたの身(み)は端正(たんせい)で美しく、百千万(ひゃくせん)の福德(ふくどく)に満(み)たされ、全身(ぜんしん)から素晴らしい光明(くわうみやう)を発(は)しています。ですからそなたが向(む)かうの國(くに)に行(い)けば、その國(くに)にいる小さな仏(ぶつ)や菩薩(ぼさつ)たちを見下(みくだ)げる心(こころ)が生(な)じてしまうかも知(し)れません。しかし、それは大変(たいへん)な心得(こころえ)ちがいです。それゆえそうならぬように気(き)をつけなければならないのです」

【妙音菩薩が浄華宿王智仏へ感謝。「すべては如来のおかげ」】

【不淨の娑婆世界が金銀に輝く】——

【三四頁 終行】 すると妙音菩薩は浄華宿王智仏に申し上げました。

「はい、仰(おほ)せの通り(とおり)にします。しかし、私が娑婆(しゃば)世界(せかい)へ行(い)くことができること自体(こころみ)が、これは他(ほか)でもありません。／『皆是(みなこ)れ如来(にが)の力(ちから)・如来(にが)の神通(じんずう)遊戯(ゆげ)・如来(にが)の功德(くわんとく)智慧(ちゐ)莊嚴(じやうげん)ならん』) すべては如来(にが)のおかげ(おかげ)による(よ)るものであります。すべては如来(にが)が持つ(も)つ自由自在(じゆうじざい)の神通(じんずう)力(ちから)のおかげ(おかげ)であり、如来(にが)の偉大(ゐたい)なるお徳(とく)と最高(さいこう)の智慧(ちゐ)による(よ)るものです」と

①浄華宿王智仏へ感謝(大本への感謝)を申し上げた(した)のでした。

【三五〇頁 一行】 『身(み)動搖(どうごう)せずして三昧(さんまい)に入(い)り、~耆闍崛山(ぎしゃくせん) ~八萬四千(はちまんしよせん)の衆寶(しゆほ)の蓮華(れんげ)を化作(けさ)せり』) そう言う(いう)と妙音菩薩はそのま(まま)身(み)を動(うご)かさず(さ)に(こころを定(さだ)める) ②『禪定(ぜんじやう)の境地(きやうぢ)に入(い)りました。すると妙音菩薩(めいおんぼさつ)はその三昧(さんまい)の力(ちから)によ(よ)って、③娑婆世界(しゃばせかい)の耆闍崛山(ぎしゃくせん)・靈鷲山(りやうじゆせん)の法座(ほうざ)の周圍(しゅうい)一帯(いつたい)に八萬四千(はちまんしよせん)におよ(およ)ぶ寶石(ごうせき)の『蓮華(れんげ)』を忽然(こつぜん)と現(あら)わした(した)のでした。美しく輝(かが)く『蓮華(れんげ)』は金(きん)の莖(かき)や銀(ぎん)の葉(は)を持(も)ち、そしてその花(はな)の雄(お)しべと雌(め)しべはダイヤモン(ダイヤモンド)ででき(でき)、花(はな)びらは真(ま)っ赤(あか)なルビー(ルビー)ででき(でき)ています。

【娑婆世界が金銀に輝く理由を文殊菩薩が釈尊に問う】——

【三五〇頁 五行】 この美しいありさまを見ていた文殊菩薩は、不可思議(ふかたん)な思(おも)いと感嘆(かんだん)の思(おも)いが募(も)つり、釈尊(しゃくそん)にお尋(たず)ねした(した)のでした。

「世尊(よそん)よ。なぜこのよう(よう)な美(うつく)しい『蓮華(れんげ)』が何(なに)千万(せんまん)も現(あら)われた(られた)のでしょ(しょう)うか。この奇(き)瑞(ずい)が起(お)きた理(り)由(ゆ)は、一(いつ)体(たい)何(なに)な(な)のでござ(ござ)いませ(ませ)うか」

【文殊菩薩の問いに釈尊が答える】——

【三五〇頁 七行】すると釈迦牟尼仏は、文殊菩薩にお答えになりました

「文殊よ。はるか東方に浄華宿王智(じょうけしゅくおうち)如来がおられる浄光莊嚴(じょうこうしょうごん)という国に妙音菩薩という大菩薩がいます。この妙音菩薩が私を供養することを願ひ、無数の菩薩と共にこの娑婆世界に参り、法華経を聴聞しようと思ったために、それによって今、このような不可思議な瑞相(すいそう)が現われたのです」。

【文殊菩薩が妙音菩薩にお会いしたいと釈尊に願う】——

【三五〇頁 終二行】文殊菩薩はさらにお尋ねしました。「世尊。その妙音菩薩という方は、どのような善行をなしたために、このような奇瑞(きずい)を起こすことができる大神力を具えられたのでしょうか？ そして素晴らしい三昧の境地に達せられたのは何故なのでしょう？ 世尊。私もそのような三昧に至る修行をさせて頂きたいと思いますので、その大菩薩が娑婆世界にお越しになるならば、どうぞ世尊の大神力でその大菩薩に私たちを会わせて下さい」とお願いをしたのでした

【文殊菩薩の願ひに釈尊が応える】——

【三五〇頁 四行】それを聞いた釈迦牟尼仏は、文殊菩薩にお答えになりました。

「文殊よ。遠い遠い過去世において仏となられた多宝如来が、あなた方の為に妙音菩薩の姿を現わしてくれるでありますよ」

【釈尊の命を受けて、多宝如来が妙音菩薩に手配】——

【三五〇頁 五行】すると多宝仏文殊菩薩は、はるか遠くの浄光莊嚴(じょうこうしょうごん)という国にいる妙音菩薩に向かって言いました。

（『善男子來(きた)れ、文殊師利法王子汝が身を見んと欲す』）「善男子よ。娑婆世界にやって来なさい。文殊菩薩があなたに会いたがっていますよ」とお呼びになりました。

【妙音菩薩が娑婆世界にやって来る。そして、釈尊と多宝仏に挨拶】——

【三五〇頁 七行】そのお声に依じて妙音菩薩は浄光莊嚴国から姿を消し、八万四千の菩薩たちを引き連れて娑婆(しゃば)世界にやって来ました。しかも娑婆世界に来るまでに通過したすべての国々では、大地が六種に振動し、空から七宝の蓮華が雨のように降り注がれました。そして、百千の天界の楽器がひとりでも美しい音楽の調(しら)べを奏(かな)でたのでした。妙音菩薩の姿はとても美しく、この菩薩の瞳は青蓮華(しょうれんげ)のように鮮やかに輝いており、端正に整っているお顔とお姿は、百千万の月を合わせても遠く及ばない美しい光を放っています。お体は純金のような色をし、無量百千という無数の功德によって全身が美しく輝いています。／（『威徳熾盛(いとくしじょう)にして光明照曜(こうみょうしょうよう)し、諸相具足(しよそうぐそく)して』）そして誰もが尊敬の念を起こさずにはおれない偉大な徳分が体全体を覆(おお)い、それが光明となって全身から発せられています。しかも仏の三十二相と同様にあらゆる徳相を具え、天上界の力士で

ある那羅延天(ならえんてん)のように力強くたくましい体格をしています。

【三五頁 終行】そして妙音菩薩は、七宝(しっぽう)で作られた楼閣(ろうかく)に入室し虚空へと飛んで行きました。しかも多くの菩薩たちがその楼閣を恭(うやうや)しく取り囲み、七多羅樹(しちたらじゆ)という高さを飛び続け、娑婆世界の耆闍崛山(ぎしゃくせん・靈鷲山(りやうじゆせん))に到着しました。到着すると妙音菩薩はその七宝の楼閣から出て来て、数百千の金の価値を持つ首飾りを釈尊に捧げ、釈尊の御(み)足に額を付けて礼拝し、ご挨拶を申し上げたのでした。

【三五頁 三行】「世尊よ。浄華宿王智如来からのご挨拶をお伝え申し上げます」

(『少病少惱(しょうびしょうのう)起居經利(きききょうり)にして安樂に行じたもうや不(いな)や、四大調和(じようわ)なりや不(いな)や』)「ご病気はされませんでしたでしょうか。お体はお健やかでしょうか。／(『世事(せじ)は忍びつべしや不(いな)や』)この娑婆世界の様々な出来事に、お心をお煩(わづら)わせではないでしょうか。／(『衆生は度し易(やす)しや不(いな)や』)娑婆世界の衆生は世尊の教化に素直に従い、世尊の手を煩わせてはいないでしょうか。衆生の心に貪・瞋・痴(とん・じん・ち)や人を妬(ねた)んだりする心、物惜(ものお)しみをしたり、憍慢(きょうまん)な心がはびこってはいないでしょうか。／(『父母(ぶも)に孝せず～邪見不善(じゃけんふぜん)の心にして五情(ごじよう)を攝(おさ)めざることなしや不(いな)や』)衆生は親孝行を尽くさず、僧を敬わず、誤った思想に振り回され、邪悪な思いにかられ、自分の五官の欲望に溺(おぼ)れてはいないでしょうか」

【三五頁 七行】(『衆生は能(よ)く諸(もろもろ)の魔怨(まおん)を降伏(ごうぶく)するや不(いな)や』)「世尊よ。衆生は自分に降りかかる様々な悪魔を打ち払っているでしょうか。そして世尊が法華経をお説きになられて、多宝如来さまがその証明役としてお姿をお現わしになられましたでしょうか」と世尊に浄華宿王智如来のご挨拶をお伝えしました。

【三五頁 終四行】すると、釈尊にご挨拶を申し上げた妙音菩薩は、次に多宝如来に対してもご挨拶申し上げました。

「多宝如来よ、お健やかでありましたでしょうか。久しく宝塔の中におられますが、ご機嫌はいかがでしょうか」

【妙音菩薩が釈尊に多宝如来に拝謁(はいえつ)することを願う】――

【三五頁 終三行】こう申し上げた妙音菩薩は、あらためて釈尊に願い出ました。

「世尊よ。多宝如来は今、塔の中におられますが、そのお姿を拝みとう存じます。どうぞ世尊のお力でお目にかからせてください」

【三五頁 終行】すると釈尊は多宝如来に向かって言われました。

「多宝如来よ、妙音菩薩がお目にかかりたいと願っています。どうぞお会いになってください」

その言葉を受けて、多宝如来は妙音菩薩に語りかけられました。

【三五頁 一行】「よろしい。妙音菩薩よ。そなたは①釈尊を『供養する』ためによくぞ来られました。そして②『法華経を聞く』ために、そして文殊菩薩をはじめとする③『仏弟子たちに会う』ためにこうしてこられたのは、本当に立派なことですよ」と、妙音菩薩がこの三つの目的のために娑婆

(しゃ) 世界に来たことを讃えました。

【華徳(けとく)菩薩が妙音菩薩の徳分について釈尊に伺う】——

【三五三頁 二行】すると、この法会(ほうえ)の場にいた華徳(けとく)菩薩が、釈尊にお尋ねしました。「世尊よ。この妙音菩薩というお方は、これまで如何なる善行を積み、かつ、どのような徳分を具えたためにこうした神力を身に付けることができたのでしょうか」

【華徳菩薩の問いに釈尊が答える／妙音菩薩の徳分について】——

【三五三頁 四行】釈尊は華徳菩薩に答えられました。

「華徳菩薩よ。それは次のようなことがあったためです。はるか昔、雲雷音王仏(うんらいおんのうぶつ)がおられた時、国の名前は現一切世間(げんいっさいせけん)といい、時代は喜見(ぎけん)といいました。その国に妙音菩薩がいました。この妙音菩薩は雲雷音王仏を供養・讃嘆するために十萬種類の様々な音楽を奏(かな)で、あわせて八万四千におよぶ宝の器を捧げ、それを一万二千年間の長きにわたって供養を続けたのでした。その大きな功德によって、現在、妙音菩薩は浄華宿王智(じょうけしゅくおうち)如来のもとに生まれることができ、そしてあのような神力を得たのです」

【三五三頁 終五行】「華徳菩薩よ。あなたはどう思いますか。じつはその昔の妙音菩薩こそ、現在の妙音菩薩その人なのです。華徳菩薩よ。この妙音菩薩はこのようにずっと昔から無数の仏に仕え、供養し、長い間、徳の本(もと)となる『善行』を積み、その報いとして恒河沙(ごうがしゃ)百千萬億那由他(なゆた)という無数の仏に会うことができたのです」

【三五三頁 終行】「華徳菩薩よ。あなたはこの妙音菩薩という菩薩は、ここにいる菩薩ただ一人のように見ているようですが、そうではないのです。この菩薩は様々な身となってあらゆる所に現われ、衆生のために法華経を説いているのです」。

【三五四頁 二行】「妙音菩薩は、ある時は梵天王(ぼんでんのう)の身となって現われます。あるいは帝釈天の身となり、あるいは大自在天や天大將軍、そして毘沙門天王(びしゃもんてんのう)の身となり、ある時は徳の高い大王、富豪、中堅階級、大臣、バラモンの身となって現われます。そればかりか、出家、在家の修行者の身となり、先ほどの富豪や大臣などの妻の身となり、そのほか男の子や女の子、あるいは天人・竜神・鬼神、そして人間や人間以外の生き物の身となって姿を現わして、この法華経を説き広めるのです」

【妙音菩薩は娑婆世界(現実の世界)を救う菩薩】——

【三五四頁 終四行】「この妙音菩薩は、様々な生き物、地獄界や餓鬼界、畜生界をはじめとする苦難の世界であえいでいる者たちを救済する菩薩であります。つまり墮落(だらく)した言わば最低と思われるような人を、妙音菩薩は蔑(あげす)んだり、見下したり、憎んだりすることなく、平等に救うのです」

【三五四頁 終三行】「この妙音菩薩は、例えば男子禁制の奥御殿(おくごてん)に行く必要があれば、女身(にょしん)に身を変じて赴(おもむ)き、教えを説くのです」

【三五四頁 終二行】「華徳菩薩よ。この妙音菩薩は娑婆(しゃ)世界のすべての衆生を救済し、守護す

る菩薩です。様々な姿に変化(へんげ)し、／『此の娑婆国土に在(あ)って諸(もろもろ)の衆生の爲に是(こ)の經典を説く。神通・変化(へんげ)・智慧に於て損減(そんげん)する所なし』この娑婆世界の全ての衆生に対して教えを説くのですが、妙音菩薩の神力は、決して損(そこ)なわれたり、衰えるものではありません。つまり『理想』である教えを『現実』世界に説く時、ともすると、理想と現実が一致せず、理想通りには行かなくなることがありますが、努力を惜しんではならないのです。理想を夢に描くばかりで、理想を現実化する努力を怠(おこた)ってはなりません。妙音菩薩の神力は、現実に敗れてしまってその神力が損(そこ)なわれるようなものではないのです」

【三五五頁 二行】「妙音菩薩は、／『若干(そこばく)の智慧を以て明(あきら)かに娑婆世界を照して、一切衆生をして各(おのおの)所知(しよち)を得せしむ』大いなる智慧をもって娑婆世界を照らし、一切衆生が『人は如何に生きるべきかの道』を自ら知りうるように導いているのです。そして十方の恒河沙(ごうがしゃ)という無数の世界においても、娑婆世界と同様に導いています。もし声聞や縁覚、菩薩の身となって法を説くのがふさわしいと思われる者のためには、声聞・縁覚・菩薩の身となって法を説きます。また仏の身となって法を説くのがふさわしいと思われる者のためには、仏の姿を現わして法を説くのです」

【三五五頁 終五行】「妙音菩薩はこのように、／『種種に度すべき所の者に隨(したが)って爲に形を現ず』教化すべき相手に応じて様々な姿となって現われるのです。／『乃至(ない)滅度を以て得度(とくど)すべき者には滅度を示現(じげん)す』もし、『死』を以て教化するのが適切だと思われる者のためには、『自らの死』を以て相手を教化し、教えの尊さを説き示します。華徳菩薩よ。妙音菩薩は以上のような大神力と智慧の力を持っている菩薩なのであります」

【妙音菩薩が得た『三味の境地』について華徳菩薩が釈尊に問う】——

【三五五頁 終三行】その時、華徳(けとく)菩薩は釈尊にお尋ねしました。

「世尊よ。妙音菩薩は深く善行を实践されたために、現在のような徳を成就されたのだと存じます。世尊よ。妙音菩薩はさらにその上にどのような『三味・さんまい』の境地を身に付けられたために、あらゆる身となって一切衆生を教化・救済することができるようになったのでしょうか。その『三味』とは、一体どのような『三味』なのでしょう」

【華徳菩薩の問いに釈尊が答える／妙音菩薩の『三味』について】——

【三五五頁 終行】すると仏さまは、華徳菩薩に答えられました。

「善男子よ。それは(先の薬王菩薩が具えていたものと同じ)『現一切色身三味(げんいつしきしんさんまい)／導く相手に応じて、自由自在に姿を変え、自由に法を説く力をもつ境地』という『三味』の境地です。妙音菩薩はこの『三味』を身につけていますので、以上のように無数の衆生を教化し、無量の利益(りやく)を与えることができるのです」

【三五六頁 二行】釈尊が以上のように妙音菩薩についての教えをお説きになりますと、妙音菩薩と共に浄光莊嚴(じょうこうしょうごん)という国からやって来た八万四千の菩薩たち、／『此の娑婆世界の無量の菩薩、亦是(またこ)の三味及び陀羅尼(だらに)を得たり』そして娑婆世界にいる無数の菩薩

たちは、みな一斉にこの同じ『現一切色身三昧』を身に付けることができたのでした。そしてあらゆる善を進め、悪をとどめる力を得ることができたのでした」

【三五六頁 四行】その時、妙音菩薩は釈迦牟尼仏、ならびに多宝仏塔を供養するという目的を果たしましたので、本国の浄光莊嚴国へと帰って行きました。

そしてその帰路の途中にあるすべての国々は、感激のあまりに大地が六種に震動し、天空から美しい花々が降り注がれ、様々な音楽が奏でられ、妙音菩薩を讃えたのでした。

【本国(浄光莊嚴国)に帰った妙音菩薩が、浄華宿王智仏に報告】——

【三五六頁 六行】本国に帰った妙音菩薩は、八万四千という数多くの菩薩に取り囲まれながら浄華宿王智(じょうけしゅくおうち)仏のみもとに参って、次のように報告をしました。

「世尊よ。私は娑婆世界に赴(おもむ)いて衆生に豊かな利益(りやく)を与えました。そして釈迦牟尼仏にお会いすることができました。また多宝仏塔も拝見することができ、両尊を供養・讃歎して参りました。そればかりか文殊菩薩・薬王菩薩・得勢精進力(とくごんしょうじんりき)菩薩・勇施(ゆうせ)菩薩をはじめとする数多くの菩薩たちにも会うことができました。そして私と共に赴いた八万四千の菩薩と共に、みな一斉に『現一切色身三昧』という三昧の境地を得ることができるよう導いてきました。それは大変、有難いことでした」

【妙音菩薩品を聞いた無数の菩薩が『無生法忍(むしょうぼうにん)』を得る】——

【三五六頁 終二行】以上の妙音菩薩の説話を世尊が説き終えられると、四万二千という数多くの菩薩たちは、『無生法忍・むしょうぼうにん/どんな現象の変化にも動じることのない境地』という境地に得ることができました。さらに華徳菩薩は、『法華三昧/法華經を深く信じ、身に行い、心身共に何事にも動じない境地』の境地に達することができたのでした。



りそう せかい げんじつ せかい
理想の世界と現実の世界

(P435・1行/P329・1行)

とくほん う
徳本を植えて

(P439・終2行/P333・7行)

「善行」をすること。「善行」をすることによって、その人の「徳」が育ちます。

※ 『薄徳(はくとく)の人は善根(ぜんこん)を種(う)えず』 (二七六頁 一行 『如来寿量品』)

『諸(もろもろ)の徳本(とくほん)を植(う)え』 (三八三頁 一行 『普賢菩薩勸発品』)

『衆善奉行(しゅうぜんぶぎょう)』 (『七仏通戒偈』)

《^{しゆい}思惟のひととき ①》

「徳本を植える」とは、「善行」をすることであり、「善行」することによって、『自分の徳分跡が育つのだと庭野開祖は説きます。

— では、私は、自身の「徳分」を高めるために、「善行を行う」ことを心がけていますか？（「徳」を植えて育てようとしていますか？） また、昨日、今日、どんな「善行」を行いましたか？（植えましたか？） 具体的に振り返ってみましょう。

げれつ おもい しょう 下劣の想を生ずることなかれ

(P449・終行/P341・5行)

「理想」というものは心の中に創りあげた相（すがた）で～ ところが、「現実」というものは理想にくらべると、はるかに小さい、低い、醜いすがたをしています。～ しかし、そうした現実の世界において、なおかつ高い人格を完成している人というものは、よしんばその姿形は小さくても、理想のすがたよりもずっとすくれているのです。

も ぶつ ぼさつおよ こくど げれつ おもい しょう
『若しは佛・菩薩及び国土に下劣の想を生ずることなかれ』 (三四九頁 終二行)

（娑婆世界）の仏・菩薩や国土に対して、見下げるような思いを生ずる恐れがありますが、それは大変な考え違いですから気を付けることです。

《^{しゆい}思惟のひととき ②》

以上の経文を通して— 「理想」と比べて、目の前の「現実の世界」(現状)を見て、「嘆いて」みたり、または現状を「所詮(しょせん)は、こんなものか」、「一体、お前は何をしているんだ!」、「どいつも、こいつも愚かな奴だ」等、周囲や相手を「さげすみ」、「とがめ」、「非難する」ことがあってはならず、また、そうした現実の世界の中で、一生懸命（善行を）やっている人（または自分）のことを「見下げてはならない」と教えられています。

— では、そうしたこと(目の前の現実や、そこにいる人を、「理想」と比較して「さげすみ」「非難・とがめる」こと)が私にはないか？（理想と比べて、現実を嘆き、または、諷めたり、投げ出してはいないか） 振り返ってみましょう。

われいましやばせかい いた みなこ によらい ちから によらい じんづうゆ け によらい くどく
『**①**我今娑婆世界に詣らんこと、皆是れ如來の力・如來の神通遊戯・如來の功德

ち えしょうごん みどうよう ざんまい い ぎしゃくせん ほんまんしせん
智慧莊嚴ならん。～ **②**身動揺せずして三昧に入り、～ **③**者闍崛山 ～八萬四千の

しゅほう れんげ けさ
衆寶の蓮華を化作せり』(三四九頁 終行)

おおもと かんしゃ げんじつ か
大本に感謝すると現実を変えることができる

(P451・1行/P342・2行)

- ①「全ては如来のおかげです」と浄華宿王智仏への大本への感謝を申し上げ、⇔
- ②そのことを心に定める『禪定』の境地に入ると⇔
- ③現実の世界である娑婆世界である靈鷲山(りょうじゅうせん)に金銀の『蓮華』を現わすことができる。素晴らしい世界に変えて行くことができる。

①「大本への感謝」をし、②そのことを心に定めると、取るに足らない、劣っていると見える「現実の世界」が素晴らしい世界に変わって行くというのです。③「大本への感謝」が如何に大切であるかということです。

※ ①と②を実践すれば⇔ ③になる！(現実を変えることができる！)

《思惟のひととき ③》

①「大本への感謝」をし、②そのことを心に定めると、③「現実の世界」を素晴らしい世界に変えて行くことができるというこの教えを、あなたはどのように受け止めますか？
かみ締めてみましょう。

み しんごん いろ むりょうひゃくせん くどくしょうごん
『身は真金の色にして、無量百千の功德莊嚴せり』 (三五頁 終三行)

(妙音菩薩の) 今まで積んできた計り知れない功德が、その身を美しく輝かせている。
徳の高い人、善行を積み重ねて来た人は、顔のどこかにそれが滲(にじ)み出ているものです。

《思惟のひととき ④》

『身は真金(しんごん)の色にして～』 — 徳の高い人、「善行」を積み重ねて来た人は、顔のどこかにそれがにじみ出ているものです。と庭野開祖は説きます。
— では、①もし私が信仰をしていなかったなら、「どんな顔」をしているか？
②また信仰をしたおかげで、今の私は「どんな顔」になっているか？
③そしてその「顔」になった源である「尊さを育んだ『善行』」とは、一体「何か」？ について考えてみましょう。

しゃかむにぶつ くよう ほけきょう き ならび もんじゅしりとう み ため ゆえ ここ
『釋迦牟尼佛を供養し、および法華經を聴き、并に文殊師利等を見んが爲の故に此

らいし
に來至せり』 (三五頁 一行)

①釈迦牟尼仏を供養し、②法華經を聞き、また③文殊菩薩をはじめとする菩薩や仏弟子たちに会うために来られたのは大變立派なことです(と多宝如来はおほめになりました)。

ほとけ くよう おし き ぼさつ みなら
仏を供養し、教えを聞き、菩薩を見習う

(P477・1行/P363・5行)

これは大事なお言葉です。法華經をお説きになった釈迦牟尼仏のご恩に報いるために、①「**仏さまを供養し**」②「**法華經の教えを聞き**」、その教えを実践する菩薩たちに会って③「**菩薩を見習って手本にする**」。この三つを果たすために妙音菩薩が娑婆世界に来られたのを、妙法の証明者である多宝如来がおほめになっておられるのは、この三つが非常に大切なことを証明されたことにほかなりません。

理想国の大菩薩でさえそうですから、ましてや、われわれが常に①「**仏さまを供養し**」②「**法華經の教えを聞き**」、その教えを実践する菩薩たちを③「**見習って手本にする**」。そして実践することに努めなければならないのは、『**信仰姿勢**』として大切であるということ)言うまでもありません。

《**患難のひととき** ⑤》

①「**仏を供養し**」、②「**法華經の教えを聞き**」、その教えを実践する菩薩たちに会って③「**菩薩を見習う**」。この三つが大切な「**信仰姿勢**」です。と庭野開祖は説いています。

— では、私の日頃の「**信仰姿勢**」で、この三つのことを大切にしているか？ または、この三つを大切にしたいと思うか？ 少し考えてみましょう。

『**萬二千歳に於て、十萬種の伎樂を以て雲雷音王佛に供養し、并に八萬四千の七**

寶の鉢を奉^{ほう}上^{じやう}す』 (三五三頁 六行)

さまざまな音楽をもって、雲雷音王仏を供養し、数多くの七宝の器を捧げました。

音楽を奏して仏さまのお徳を讃嘆することですが、しかし、ここでは音楽を奏し続けたという意味ではなく、「**ことば**」をもって仏さまを讃嘆したことを象徴しているのです。

また八万四千の「七宝の鉢(器)」を捧げたということは、これは「**八万四千の法門**」を意味し、「**仏さまの教えを多くの人に説く**」ことによって、仏恩に報じることの意味にほかなりません。

ことばの力^{ちから}

(P480・2行/P366・1行)

仏教では、「**ことば**」といものをひじょうに尊重しています。～(ある行動を起こすときに、「**ことば**」にして考え行動を起こします)。<**ことばが人間をつくった**>ということもできるわけです。

～我々が心の中に何かを考える時は、必ず「**ことば**」で考えます。ことば無しには、何も考えることはできません。～妙音菩薩というお方に、なぜ「**妙音**」という名が付けられたかということ深く考えてみますと、「**美しい音声**」というのは「**真理のことば**」という意味でなければならぬことが判ってきます。

※ ことばの力 (附録品第六)

(第4巻P166・4行/P123・6行)

ことばというものはそれほど大事なものなのですから、日本では昔から『言霊(ことたま)』という言われ方がされてきました。つまり、ことばそれ自体に生命(いのち)があるように表現したものです。～心のなかで思う言葉が「精神」となり、「思想」となり、「信」となって、「自分」を作り、自分を動かします。同様に、声として発する「言葉」は「人をつくり」「人を動かします。人を「生かしも、殺しも」します。

※ 「はじめに言葉ありき」 『新約聖書「ヨハネによる福音書」』

《息^い惟^いのひととき ⑥》

人間は心の中で「ことば」で考え、そしてその考えが「行動」に移すことになる。だからこそ、「ことば」は大切であります。しかも、「妙音菩薩」の「妙音」とは、「真理のことば」だと庭野開祖は説いています。

— 私は日ごろ、「どんなことば」を発しているのでしょうか？ また「真理のことば」をどれだけ発しているのでしょうか？ ふうに返ってみましょう。

『華^け徳^{とく}、汝^{なん}但^じ妙^だ音^み菩^ぼ薩^{さつ}其^その身^み此^こに在^ありとのみ見る。而^みも是^{しか}の菩^こ薩^ぼは種^{しゅ}種^{じゆ}の身^みを現^{げん}じ

て、處^{しよ}處^{しよ}に諸^{もろ}の衆^{しゅ}生^{じゆう}の爲^{ため}に是^この經^{きやう}典^{でん}を説^とく』 (三五三頁 終行)

華徳よ。あなたは、妙音菩薩はここにいる唯一人(ただひとり)のようにみているでしょうが、そうではありません。この妙音菩薩は、様々な身となってあらゆる所に現われ、衆生の為に法華経を説いているのです。

われわれも妙^み音^よ菩^ぼ薩^{さつ}

(P489・1行/P373・2行)

我々の周囲にも、無数の妙音菩薩がおられるわけです。～いや、我々自身が妙音菩薩の化身であるかもしれないのです。～「真理のことば」をもって法華経の理想を説き人を救うならば、妙音菩薩の化身にまちがいないのです。

《息^い惟^いのひととき ⑦》

「真理のことば」をもって法華経の理想を説くならば、私たち一人ひとは妙音菩薩の化身にまちがいない。と庭野開祖は説いています。

これはなにも難しく考えて、高尚(こうしょう)な「真理のことば」を説かなければならないということではなく、平易な(簡単な)ことばで教えを説くことも同様であると言えます。— では、この①「真理のことば」を説くということ、②そのことばを用いて人々をお救いする行動をとったならば、私たちも妙音菩薩である。ということをあなたはどのように考えますか？ 少し考えてみましょう。

『此の娑婆国土に在って 諸の衆生の爲に是の經典を説く。神通・変化・智慧に於て損減する所なし』 (三五五頁 一行)

この娑婆国土にあって、衆生のために法華經を説いているのですが、その神通変化の力や、智慧の力がそこなわれたり、減少することは決してないのです。

理想は現実化しても損なわれぬ (P493・1行/P376・5行)

理想を現実化する時は、その結果は必ずと言ってよいほど、理想に劣るすがたとならざるを得ません。現実は、理想どおりにはいかないからです。～だからといって、その理想は少しも変わらず、また理想を求める智慧の力が失われたり、損なわれたりすることはありません。

ですから理想を大事にするあまり、それを汚(けが)すまいとして、ただ夢に描くばかりで現実化する努力をしないのは、じつに無意味なことなのです。

《**愚惟のひととき** ⑧》

現実

現実は、理想どおりにはいかないものです。しかし理想を夢に描くだけで、現実化する努力をしないのは、じつに無意味なことなのです。と庭野開祖は説いています。

— このことをあなたはどのように考えますか？ かみ締めてみましょう。

《**愚惟のふいかえり** まとめ》

今日の『妙音菩薩品第二十四』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

以上